

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「アジア文字研究基盤の構築 1：文字学に関する用語・概念の研究」（平成 29 年度第 1 回研究会）

日時：平成 29 年 6 月 3 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時、6 月 4 日（日曜日）午前 10 時より午後 16 時

場所：AA 研マルチメディア室（304）

報告者名（所属）

6月3日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクト全体の説明」

(On the joint-research project)

昨年度（平成 28 年度）新規課題審査会で代表者が行ったプレゼンテーションを基に、本課題の特色や目標、想定される成果物などを説明した。

2) 荒川慎太郎（AA研所員）

「西夏文字—字形と構成の特徴」

(Tangut script: Characteristics of the shapes and the structures)

「疑似漢字」の一つとして知られる西夏文字の、字形と構成の特徴を概説した。西夏文字は、機能的に表意（表語）文字で、約 6000 という多くの字数があるものの、「単純字が少ない」「象形性を欠く」など、文字の類型的にも興味深い。西夏語の語幹変化（母音の屈折など）が字形に反映されるなどの特徴も例とともに示した。また「対称字」「文字配置の象形性」など、文字学に関係する術語も紹介した。

3) 岡野 賢二（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

「ビルマ語碑文文字—字形と構成の特徴」

(Burmese script found in (stone) inscriptions: its characteristics of the shapes and the structures)

インド系文字であるビルマ語について、現代ビルマ語に存在する文字種と組み合わせ（綴り字法）を概観した後、碑文ビルマ文字にのみ見られる特徴のいくつかを紹介した。ここで碑文ビルマ文字とはビルマ語が書き始められた 12 世紀以降、特にバガン時代のものをいう。ビルマ語は単音節的な言語であり、現代の綴り字法も基本的に音節を単位としているが、碑文ビルマ文字はインド系言語（パーリ語、サンスクリット語）やモン語の綴り字の影響を受けている可能性があり、音節区切りとは一致しない単位での区切りや結合が見られる。これは特に行末、行頭に明白に見られ、言語実態に即した綴り字法が当時は未発達であったということを示している。

6月4日

4) 吉川雅之（AA 研共同研究員，東京大学）

「漢語派諸言語の書記言語化—字形と表記体系」

(Writing Sinitic languages: Uniqueness of the Chinese character forms and the writing systems)

漢語派に属する 3 言語（粵語，客家語，閩南語）を取り上げ、特徴的な語の表記が呈した諸相を、19 世紀後半～20 世紀前半と現代に重点を置いて概説した。19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、粵語と客家語では既存の漢字に口偏を付す、反切を利用するといった方法で新造字が編み出されたのに対し、閩南語では同義字で代り替する方策が採られた。現代では文字言語のコード切り替えとも称すべき現象が見られることを述べた。

5) 落合淳思 (AA 研共同研究員, 立命館大学)

「漢字の字形変化と抽象性」

(The shape change and abstraction of Chinese character)

漢字の字形の歴史について、図表化した実例とともに紹介し、あわせて現在の研究課題の内容を述べた。漢字は歴史とともに、楷書に代表されるように字形の抽象化が進んだが、実は字形の抽象化以前に構造としての抽象化が進んでおり、具体的に（視覚的に）対象を表した象形文字や会意文字が減少し、意味と発音で表す形声文字や一種の当て字である仮借文字が増加するという現象が比較的早い段階で見られる。

それぞれの発表に関して、参加メンバーの専門とする様々な文字の見地から、自由かつ活発な討議が行われた。

6) 全員

今後の研究会と成果公開に関する打ち合わせを行った。